

ひよくれんり4

もくじ

ひよくれんり4	5
プロローグ ～奥様の憂い～	6
いい夫婦の日	10
クリスマス・イブは二人で……	23
クリスマス・パーティー！	69
柏木家の年越し	81
二人の初詣	94
上手な家族のつくりかた	98
しあわせの足音	111
未熟なのはお互いさま	120
些細なことが大事件！	132
パパとママは仲良しです	143
夕焼け小焼けにはみ出た長ネギ	155
プライバシーは守りましょう？	165
新米ママとお兄ちゃん	176
柱に刻まれた思い出	183
血	194
いつか去る場所	240
エピローグ ～おまえたちの未来を愛してる～	253
番外編 黒猫狂想曲	275

ひよくれんり4

プロローグ　く奥様の憂い

夫婦とは、互いを支え合うもの。

それが私の考える『理想の夫婦』。

でも、あれ？　あれれ？

ふと、疑問に思う。

支え合う……これ、私達夫婦は「できていないんじゃないか」って。

旦那様の正宗さんは私の弱い所を受け入れた上で、いっぱい支えてくれる。本当に、私にはすぎた人だとつくづく思う。

でも、私は……？

正宗さんのことは大好きだし（これは胸を張って言える）、あ、あい……愛してるけど（これはちょっと人様の前で言うのは気恥ずかしい……）、私の場合、思いばかりが先行して彼の支えにはなれていないんじゃないか？

これまでの夫婦生活を思い出してみる。

む……むむむむ……

み、見事に……迷惑をかけては正宗さんにフォローされ、パニックでは正宗さんにフォローされ……

薄々感じてはいたけれど、私ばかりが、正宗さんを頼っている。

私、ちょっと旦那様に「おんぶにだっこ」すぎやしないか？

私こと柏木千鶴（旧姓は峰岸です）は、お見合いで柏木正宗さんと出会った。

親に無理やりセッティングされたので、私は全然乗り気じゃなかったんだけど、目の前に現れたのは、「えっ？　どうしてこんな人がお見合いに？」と思うくらい素敵な男性だった。

長身にサラサラの黒髪、整ったお顔にとっても似合う眼鏡。ええ、実は私、黒髪眼鏡の男性が大好物でした！　正宗さんは、ど真ん中のタイプだったのです！

そのうえ性格も穏やかで優しいという、完璧なイケメン高校教師がお見合いの席に現れ、私は「きつこの人も私と同じで、無理やり駆り出されたんだらうなあ。この場限りに違いない」なんて思っていたから、その後交際に発展するとは思ってもよらず！

だって私、自分で言うのも虚しいですが、普通の女ですよ。

身長は百五十二センチでチビだし、胸は……ささやかだし。顔立ちだって平凡。

そんな私がですよ？　イケメン眼鏡男子と結婚を前提にお付き合いすることになるなんて！

恋愛経験なんてほぼ無かったから、毎回のデートは緊張しっぱなしで……

でも、そうやって二人ですごすうちに、正宗さんのことを本気でね、好きになったんです。

奇跡的にも、正宗さんも私のことを好きになってくださったみたいで……
そして、プロポーズを経て、出会ってから約半年という早さで結婚しました。

今は、正宗さんの亡きお祖父様から譲り受けた、一戸建ての日本家屋で一緒に暮らしている。
ずっと憧れていた縁側もあるんだよ！ 少し古いけど、落ち着く我が家です。

出会いから結婚までの期間が短かったから、私達の新婚生活はまだお互いを探っている面があったと思う。けれど、結婚後も恋愛期間が続いているようなドキドキ感と新鮮さがあって、うん……
幸せな日々だった。(つて、過去形にすると、今が不幸せみたいに聞こえるけど違います！ 今も
幸せです！ ……つて惚気(のろけ)てんじゃねー！ つて感じですよね、すみません！)

結婚してから、いろんなことがあった。

妊娠したかもしれないって思った時——私は喜びよりも不安でいっぱいになって、パニックを起こしてしまった。怖くてしょうがなくて、そんな自分が大嫌いになって……

けれど、正宗さんは私の弱さを受け入れてくれた。

もうすぐ結婚して一年経つので、周りから「そろそろ、赤ちゃんは？」って言われることが多くなった。本音を言うと、今でも不安はあるし、怖い。

けれど、正宗さんとなら乗り越えられるんじゃないか、何より、彼との子供がほしい！ つて、心から思えるようになった。

それから、ずっと隠していた私のオタク趣味(しかも、ただのオタクじゃなくて、男性同士の恋

愛——ボーイズラブが大好きなんです！)が予期せぬ形でバレてしまった時、反射的に逃げ出してしまった私を追いかけて来て、『驚いたけど、こんなことで嫌いにならない』つて言ってくれた。
今思い返すと、悶絶(もんぜつ)してしまうような記憶ばかりだけれど、そんな積み重ねが今の私達の関係を
作ってきたんだ。

私は前の自分より、今の自分が好き。ちゃんとした大人だつて胸を張つては言えないけど、少しずつ成長できてるつて思う。

私にはもったいないくらいに旦那様に、「私なんかでいいのかな……」つて悩むこともあったけれど、今は、うじうじ悩むくらいなら自分を磨(みが)く努力をしよう！ つて、前向きに考えられるようになった。

それは全部、正宗さんが支えてくれたおかげ。

正宗さんと出会って、私はいい方向に変わった。とても幸せなことだと思つても、待つて？

正宗さんは弱音を吐かない。仕事の愚痴(ぐち)すら言わない。
それは正宗さんが強い人だから……なのかもしれない。

だけど誰だつて、悩んだり、苦しんだりするでしょう？

そんな時、正宗さんは私を頼(たの)んでくれていないような気がする。

私じゃ力不足……だからなんだろうか？

私は……正宗さんの支えに、なれないんだろうか？

いい夫婦の日

十一月に入ると、すっかり冷えこみますよね。

私達の住む街はあまり雪は降りませんが、吐く息がしつかり白くなる程度には寒いです。鍋が美味しい季節だなあ……

そんな十一月も半ばをすぎたある夜のこと。私は鶏団子鍋を用意して旦那様の帰りを待っていた。「ただいま帰りました」

(あつ！ お帰りだつ！)

玄関から響く旦那様の声に、私は忠犬よろしくいそいそと玄関へお出迎えに行く。えっへっへ。今夜は寒かったでしょう。温かいお鍋であつたまりましようねー。

……つて、おや？

チャコールグレイのトレンチコートを纏った正宗さんが、ピンクの薔薇の花束を持っている。なぜに!? あれっ？ 今日って何かの記念日だつたっけ？

「今日は『いい夫婦の日』、なんだそうですよ
いいふうふのひ……?」

今日は……十一月二十二日……あつ！

語呂合わせで『いい夫婦』か！

ええええ!? でもなんで!? なんで花束!?

「俺も、今日、駅のポスターを見て知ったんですが。今日は伴侶に日頃の感謝を伝える日、なんだそうです。いつもありがとうございます、千鶴さん」

まっ、正宗さんなんん!!

やばい泣きそう! 『日頃の感謝』だなんて……! 普段は花より団子を地で行く私ですが、やっばりお花を貰えるのって、嬉しいー!!

「ありがとうございます! 嬉しいです!!」

わー! お花どこに飾ろうっ? やっばりお茶の間かな? 花瓶、花瓶……
(はっ!)

……つて! 浮かれている場合ではない!!

わ、私何も用意してない! (なんせ今知ったからなー)
私だつて正宗さんにめーっちゃめっちゃ感謝してるのに!!

どうやったら、その気持ちを伝えられるんだろう……?

ううう……。せめて今日のお夕飯を正宗さんの好きなメニューにすればよかった……
今から作り直したら、正宗さんをお待たせしちゃうし……

私はどうしたものかと悩みながら、いただいた花束を花瓶に生け、お茶の間の棚の上に飾った。
正宗さんはスーツの上着を脱ぎ、ネクタイを解いて、鍋の載った炬燵の中に入った。

私も炬燵に入り、二人で鍋をつつく。

ご飯を食べ始めてからも、正宗さんに何をプレゼントしたらいいかばかり考えてしまう。でも、もう夜……だし。今からは買に行けないしな……んむむ……

じゃあ、物じゃないモノを、プレゼント？

えーと……。マッサージ券とか……？ って！ 小学生か!! 父の日や母の日の小学生か!!

でもっ、本当に肩たたきとか、腰をもみもみとか、お背中お流しします〜、くらいしか思い浮かばない!!

はっ！ もういつそ、『日頃の感謝を込めて、私、正宗さんの言うことなんでも聞きます!』はどうだろうか？ (やはり発想が小学生レベル!)

「……なんでも、ですか」

「はいっ!」

「……………それじゃあ……」

ドキドキしながら正宗さんの言葉を待つ私に、彼は爽やかな笑顔で仰るの。

「ご奉仕、してくれませんか？」

そして正宗さんが指差す先には、そそり立つ正宗さんの、アレ。

「そんな……っ」

私は恥じらいながらも、頑張っつてご奉仕……

っつええええええ!!

「ごぶっ」

夕飯時に何を破廉恥な妄想してんだ、このお馬鹿!!

飲んでいた味噌汁、ちよつと噴いちゃったし!

まっ、正宗さんはそんな……そんなエロいこと言わないよ! たぶん。

「大丈夫ですか? 千鶴さん」

「はっ、はひっ」

脳みそは大丈夫じゃないですけど大丈夫です!

心配無用であります!

(ううう……っ!)

結局、妙案は浮かばないまま……

私は食後、炬燵でまったりとテレビを見ておられる正宗さんに、

「お花、本当にありがとうございます! それで、あの、私も正宗さんに、日頃の感謝を込めて、そのっ……何かお贈りしたいのですが……」

と、しどろもどろに言う。

「そんな……。気にしないでいいですよ」

「いえいえ！ だって私、本当に正宗さんに感謝してますもん！」

こんなに素敵な旦那様と一緒に暮らすことができ、どうして感謝の気持ちを、伝えずにいられないのか。

「だって、けどその……私には正宗さんに差し上げられるようなものがなく……。なので！ なんでも言うことっ、聞きます！」

「え……」

ええーい！ 結局これしか思い浮かびませんでしたあ！！

肩もみでもマッサージでも、ごっ、ご奉仕……でも！ なんでもどんどこーい！！

なんて意気ごむ私に、正宗さんはしばし考えたあと、「それじゃあ……」と、あるリクエストをなさったわけですが……

「え……ええと、正宗さん。本当によろしいの……でしょうか……」

「はい。あ、狭い……ですか」

「いつ、いえ！」

現在正宗さんは、私を後ろから抱っこした状態（つまり正宗さんが私の座椅子状態）で、炬燵に入っております。はい。一緒に入っております。

これが正宗さんの、リクエスト……

何ゆえ!?

(……おおうふ……)

正宗さんの顎が、私の頭にちよんって乗っかっている。

背中が正宗さんの胸に当たって、ちよんって恥ずかしいけれど、とても温かくって心地いい。

でもこれ、正宗さんに一体何のメリットが？

ちら……と窺うと、正宗さんは上機嫌そうだ。わからん。イケメンの考えることは、マジわからん。

とは言っても、これだけじゃあ、申し訳ない……よね。何かしないと！

私は炬燵の上に置いてあるカゴからミカンを一つ手に取って、剥き始めた。

冬はやっぱり炬燵でミカンだよねえ。ついつい食べすぎちゃう。

白い筋も丁寧に取り……。一房、外して……

「正宗さん、はいどうぞー！」

旦那様の口元へ！

「……………」

正宗さんは、ちよんちよんくりしたようなお顔をされたあと、目元を緩めて口を開けた。(きや

ああ！ その微笑！ 至近距離だとさらに破壊力アップ！)

「……ん。美味しいですね」

「つ……は、はい。このミカン、甘いですよねっ」

ひいひい！ て、照れる！ 自分でやっておいてなんだけど、照れるなあこれ……ッ！

(あ……)

ふと、思った。

もし子供ができたら、こんな風に二人つきりでのんびりとできる時間は取れなくなるんだろうなあ。

そう考えると、こうして二人つきりで行られる時間が無性に愛おしくなって、大切なもののような気がしてきた。

も、もちろん「ずっと二人でいたいから子供を作らない！」ってわけではないですよ！

正宗さんの子供、ほしいし……。ただ、こうして二人で行られる今の時間も大事にしたいなって、思っただ。

「ま、正宗さん」

私はもう一度、ミカンを正宗さんの口元に持つていく。

「アーン」

正宗さんにはっこり微笑んで、アーンって、口を開けてくれた。

それから正宗さんもミカンを剥いて、私に食べさせてくれたのでした。

* * *

(……いい夫婦の日?)

俺は学校からの帰り道、駅のポスターを見て、十一月二十二日は『いい夫婦の日』なのだと思っただ。

そのポスターは、どうやら駅構内にある花屋が貼ったものらしい。男性が女性に花束を渡している様子が温かみのあるタッチで描かれてある。

『いい夫婦の日』は、伴侶に日頃の感謝を伝える日なのか。

そんな日もあるんだな。

(……日頃の、感謝……)

花……か。

思えば、千鶴さんに食べ物を買って帰ることはあるが、花束を買って帰ったことはないな。(……喜んでくれるだろうか……)

我ながら、感化されやすいと思いつつも、俺はすぐに、その花屋に向かった。

店内には、俺と同じようにポスターにつられてやってきたのか、数人のサラリーマンらしき男性客がいた。彼らも、家で待っている奥さんに花束を買って帰るのだろうか。

レジカウンターが空くの待つか、店内の花を眺める。

「……………」

目に入ったのは、千鶴さんのイメージにぴったりなピンクの薔薇だ。

派手ではないけれど、可愛らしい。つつい、目元が緩む。

カウンターが空くと、俺は店員さんに声を掛けた。

「すみません。あのピンクの薔薇をメインに、花束を一つ」

「ありがとうございます。奥様に、ですか？」

すぐに『奥様に』という言葉が出てくるなんて、今日は一体どれくらいの方がこの店で花束を買ったのだろう。

「はい。可愛い雰囲気の花束を、お願いします」

「かしこまりました！」

店員さんは「おまかせください！」と頼もしい返事をしたあと、イメージ通りの可愛い花束を作ってくれた。

花束を持って、家路に着く。

……こんなことをするのは初めてだから、少し気恥ずかしい。

だが、この花束を渡した時の千鶴さんの表情を想像すると、気持ちが高揚して恥ずかしさが吹き飛び、俺は足を早めた。

(きつと、びっくりするだろうな……)

「ただいま帰りました」

玄関の扉を開けて、一声。

するといつものように、千鶴さんが玄関まで、たたたと駆けてきた。

想像通り、千鶴さんは俺がかかえている花束を見て驚いている。

そんな彼女に花束をぼんと手渡す。

「今日は『いい夫婦の日』、なんだそうですよ」

千鶴さん、まだびっくりしてる……な。目がまんまるですよ？

「俺も、今日、駅のポスターを見て知ったんですが。今日は伴侶に日頃の感謝を伝える日、なんだそうです。いつもありがとうございます、千鶴さん」

俺は感謝の気持ちを込めて、彼女に言った。

「ありがとうございます！ 嬉しいですよ!!」

いえいえ。こんなに喜んでもらえて、俺も嬉しいです。

千鶴さんは花束を花瓶に生けたあと、時々視線を花にやっては、にっこりと微笑んでいる。

気に入ってもらえてよかった。

……千鶴さんのこんなに嬉しそうな顔が見られるなら、これからもたまたまに花束を買って帰ろうかなんて思いながら、夕飯を食べた。

今日はお鍋なんですね。冷えた体には熱々の鍋が美味しいです。

夕食を堪能したあと、炬燵に入ってテレビを見ていたら、千鶴さんが何やらそわそわしだした。

「お花、本当にありがとうございます！ それで、あの、私も正宗さんに、日頃の感謝を込めて、そのっ……何かお贈りしたいのですが……」

「そんな……。気にしなくていいですよ」

お返しがほしくてしたんじゃないですし、喜んでもらえたのが何より嬉しかったので……
「いえいえ！ だって私、本当に正宗さんに感謝してますもん！」
俺と一緒に暮らせて幸せだと、そう思ってくれている。
それだけで俺は……

(……俺も、本当に幸せ者です……)

「だっ、だけどその……私には正宗さんに差し上げられるようなものがなく……。なので！ なんでも言うことっ、聞きます！」

「え……」

なん……でも……？

俺の奥さんは、意識しているのかしていないのか、時々とても大胆なことを言う。

(……なんでも……か……)

正直、普段は恥ずかしくてやらないあんなこととか、滅多にしてもらえない、こんなこととか
が頭を過った。(俺も男です……)
だがこの時の俺は、無性に……

「え……ええと、正宗さん。本当によろしいの……でしょうか……」

「はい。あ、狭い……ですか」

「いつ、いえ！」

この可愛らしい人をぎゅっと抱きしめていたくて、千鶴さんを後ろから抱いて炬燵に入った。

俺の腕の中にすっぽりと収まる、小柄な彼女の体。

彼女の小さな頭に顎を乗せて、寛ぐ。これ、結構落ち着くな……

世の女性が大きなぬいぐるみを抱きしめたがる理由が、今ならわかる気がする。

(……ん？)

居心地悪そうにしていた千鶴さんが、突然、ミカンを手にした。(ミカンは炬燵と一緒に置かれるようになった。我が家の冬の風物詩だ)

千鶴さんはまず、手の中でミカンをころころと転がし、皮を剥く。そうすると房が皮から離れて剥きやすくなるのだそうだ。

そして丁寧に、白い筋を取って……

「正宗さん、はいどうぞー！」

「……………」

自分で食べるのかと思いきや、最初の一房を俺にくれた。

ありがとうございます。

自然と目が緩んでしまう。この人は本当に、俺を喜ばせるのが上手だ。

俺はあーんと口を開けた。

「……ん。美味しいですね」

口の中いっぱい、ミカンの瑞々しい甘さが広がる。

「つ……は、はい。このミカン、甘いですよねっ」

確かにこのミカンは甘いけれど、こんなに美味しく感じられるのは……

(あなたが剥むいてくれたミカンだから、ですよ。千鶴さん)

「ま、正宗さん」

千鶴さんはもう一房ひと房、ミカンを差し出ししてくれた。

「アーン」

と言いながら、俺が口を開けるのを促うながすように自分も口を開ける。可愛いなあ……

ついつい相好そうごうが緩ゆるんでしまうのを隠かくせないまま、差し出されたミカンを食べた。

そして俺も、ミカンのカゴに手を伸ばした。

奥さんの唇に、その橙色だいだいいろの一房ひと房を運はこぶために。

クリスマス・イブは二人で……

「ふんふんふーん、ふんふんふーん、ふんふんふーん♪ ヘイ！」

私は鼻歌を歌いながら、両手に持っていたエコバッグをどさつと、台所のテーブルに載せた。
はあく。重かったあ……

でも今日は、クリスマス・イブだし！ いっぱいごちそう作らなきゃー！

季節が巡るのは早いもので、もう十二月も残りわずか。

正宗さんと結婚して、二回目のクリスマスがやってきた。

去年のクリスマス・イブは土日だったし、新婚ほやほや！ ってこともありまして、正宗さんが、ホテルを予約してくれてねっ。ホテルでクリスマスディナーを堪能たんのうしたあと、お部屋で一泊しまして、それはもう素敵なクリスマスをすごしたのですよ……

「……ドキドキしっぱなしだったな……」

買ってきた食材を分けながら、ちょうど一年前のことを思い返す。

【一年前のクリスマス・イブ】

(……あわわわ……)

私はよそ行きのワンピースの上からお気に入りのコートを羽織り、少しヒールのある靴を履いた。指には、もちろん婚約指輪と結婚指輪を嵌めている。

お化粧もばっちりして臨んだ、旦那様とのホテルでのクリスマスデート。レストランのテーブルに運ばれてくるフレンチは、宝石のように綺麗だった。

(おうふ……)

自分、場違いじゃなかるうか、とめっちゃ緊張してました……

ちら……と向かい側に座る旦那様を見ると、彼は微笑を浮かべながら、品のいい仕草で料理を口に運んでいらっしやる。

はあ……。なんて絵になる人だろうか。私は正宗さんのきらつきらしたイケメンオーラにドキドキしつつ、ナイフとフォークを手にして、料理を口に入れた。

(……美味しい……)

テリーヌはニンジンとインゲンが添えてあって、クリスマスカラーになっている。可愛いなー。

「……美味しい、ですか？」

「はいっ」

高級レストランなんて、めっちゃ緊張するけど……

滅多に来れる場所じゃないんだから、楽しまないと損だよね。(プロポーズしてもらった日に行ったレストランでは、緊張のあまり、せっかくの美味しい料理をちゃんと味わえなかったし

な)

そんなこんなで美味しいクリスマスディナーとワインを堪能したあと、今日宿泊するお部屋へ移動した。

……こんな素敵なホテルに泊まれるなんて、ちょっと……いやかなりドキドキします。

おやおすと部屋に入ってみると――

「わーっ！」

大きな窓から見える街の夜景がとっても綺麗！

ホテルの庭のクリスマスイルミネーションも、綺麗だなあっ！

私は子供のように、窓にべったりと張りついて夜景に見入った。

「すごいすごい！ 素敵です〜!!」

「喜んでもらえてよかった」

そして正宗さんは、ネクタイを解きながら……

「先にシャワー使いますね」

と仰った。シャワー？

「は、はい」

そう言うと、正宗さんは浴室へと向かった。

先に、ということ。次は私がシャワーを浴びるということ。

ホテルでシャワー……つまり……

「セック……っ」

ほぎゃああああああ!! これ、セックスフラグ! フラグが立ってる!! (いやそうじゃないけど、一泊するんだからシャワーくらい浴びるけれども!)

何を今さら!? と思うよね。うん。私も思う!

だけど、この時の私は脱処女して一ヶ月余り。

つまり、まだそういうことに免疫がないわけです。

でもクリスマス・イブにホテルに一泊するってことは、つまり、そういうこと……だよな?

「おうふ……」

クリスマスディナーと夜景に浮かれていた頭が、一気に冷静さを取り戻す。

いや、あの、正宗さんとそういうことするのが嫌なわけじゃないんですよ?

嫌とかじゃ、なくて……

「恥ずかしい……」

そう。無性に恥ずかしいのです。

こんな素敵なホテルの一室で、豪華なダブルベッドの上で……なんて、まるで恋愛小説のワンシーンのようじゃないか。

ここで私は、今夜、自分にはもったいなさすぎる素敵な旦那様に……

だ、抱かれるんだよね……

正宗さんは、バスローブを纏って部屋に戻ってこられた。本気で鼻血を噴くかと思っただけで鼻を押さえてっつ、私もシャワールームへ。(だって! バスローブですよ? あまり体を拭いていないのか、水滴が合間から見えて、超エロいよ!)

……旅館でエッチ、は初夜で体験したけど、思えば私、ホテルでエッチはこれが初めてだよ! わあああああ。

心臓、バクバクいつてる……

気もそぞろにシャワーを浴び、正宗さんに倣ってバスローブを纏い、部屋に戻る。下着をどこまでつけるべきか悩んで、結局パンツだけ穿いた。

寝室に入ると、正宗さんがベッドに座って、シャンパンを飲んでた。シャンパンはクリスマスの宿泊客へのサービスで、各部屋に用意されてるんだって。

バスローブ姿でシャンパンを飲む正宗さん。なんて絵になる……っ!

「千鶴さんも飲みますか?」

「はっ、はっ!」

上ずった声で返事をする、正宗さんは苦笑した。

「そんなに緊張されると……なんだか俺も緊張しますね」

ちっとも緊張しているとは思えない余裕な仕草で、もう一つのグラスに黄金色のシャンパンを注いでくれる。

しゅわっと口の中ではじける炭酸に、ほろ苦いお酒の味……

「……………ほわぁ……………」

美味しいです、って言おうと思って顔を上げると……

「んっ」

正宗さんに唇を奪われた。

ちゅっ、ちゅちゅ……と、私の口の中にわずかに残るシャンパンを吸い尽くすみたいに、彼の舌が蠢く。

「あう……………」

グ、グラスっ！ シャンパン、零れちゃう……!!

私は口づけを受けながら、ふるふると手を伸ばしてグラスをテーブルに置こうとした。

すると、それに気づいた正宗さんがふっと苦笑して、私の手からグラスを取る。そして、それをテーブルに置いてくれた。

……って、ま、まだチューをするのですか、あわわわわわ……!!

正宗さんのバスローブを掴んで深い口づけを交わしていたら、ふわっと、体が浮いた。

「なっ……………」

(ひ、姫だっこ……………！ だと!?)

そう。いわゆるお姫様だっこをされた私は、ベッドの上にとさつと優しく落とされ、押し倒されました。

「ん……………」

バスローブをゆつくりと脱がされる。

「……………」

露わになった私の肌をじつと、見つめる正宗さん。

え、え……………？ なんかヘンですか？ やっぱりブラはつけておいた方がよかったですでしょうか!?

「すごく綺麗……………」

「ふえっ!？」

正宗さんの瞳がふっと細められ、低い声で囁かれる。

き、綺麗？ そんな、馬鹿な！

綺麗なのは……………」

「正宗さんの方……………ですよ……………」

艶やかな黒髪。整った鼻梁、綺麗な瞳。うっとりしちゃうくらい、恰好いい旦那様……………」

私はぎゅう、と正宗さんに抱きついて、

「……………だっ、大好き……………です。正宗さん……………」

と、顔を真っ赤にしながら囁いた。

だから、できればその……………」

「……………電気、消してもいいですか……………?」

こんな明るいところで、自分の裸とか痴態を晒すのは、また抵抗があるのです……………！ 無理!!

「……………はっ」

正宗さんは苦笑して、ベッドの枕元にあるつまみをひねり、照明を落としてくれた。薄暗くなると、外の灯りが差しこんできて、なんだかこう……怪しげな雰囲気ですね。

ド、ドキドキする……っ。

「俺も大好きです。千鶴さん」

そう言っつて、正宗さんはもう一度キスをしてくれる。正宗さんの舌、熱い……。シャンパンのせいか、はたまた先ほどのキスのせいか、頭がほわっつとしてしまう。

「ん……っ、んあ……っ」

ちゅぷっ、ちゅ……っつと、角度を変えて攻められるたびに、互いの唾液がいやらしく混じり合い、私の口の端から涎よだれが垂たれてしまった。正宗さんはそれに気づくと、にいつと笑い、ぺろっつと舐め取る。そしてふたたび唇をついばんだ。

そんな風にキスを交わしているうちに、気づけばバスローブはすっかり脱がされていた。

正宗さんも裸になっていて、互いの体を温めるように抱きしめ合う。

素肌と素肌をくっつけるのは、恥ずかしいけど……心地いい。

ずっつこうしていたくなるくらいだ。

「んう……っ」

やがて正宗さんの唇は、私の首筋を辿り始めた。まるで一筋の線を描くように、舌先がつうつと伝つていく。鎖骨のくぼみを舐められた時、びくつと体が震えてしまい、正宗さんの舌が止まった。

「あ……」

「ここ、気持ちよかったですか？」

笑みを浮かべた正宗さんが、ふたたびそこを舌で舐める。

ひっ、ひあつ……。な、なんで？

他の場所を舐められた時には感じなかった、ぞくぞくとした快感が走る。

「んっっ」

し、しかも正宗さん、そこをひとしきり舐めたあと、ちゅ、ちゅうつて！ す、吸いつくし！

「はう……っ」

痛いくらいに肌を吸われた。こ、これ絶対痕あとになつてる！ キ、キスマーク、つけられた！

「綺麗な色ですね」

「うう……っ」

正宗さんは痕あとをつけた部分を満足気に撫なでているけど、場所が場所なだけに私には見えないのです。あ、あとで鏡見るの怖いな……。っ。

痕あとを残すのが気に入ったのか、正宗さんはそれから首筋や胸元を強く吸っていった。

眉が寄つてしまうくらい痛いのに……どうしてか痕あとを残されるたびに、自分が正宗さんの色に染め上げられていくような気がして、ちよつと嬉しかった。

「ああっ……！」

正宗さんの手がやわやわと私の胸を揉みしだく。自分で触つてもなんとも思わないのに、この人の手に触れられるだけで、腰が抜けちゃいそうになるから不思議だ。そして頂いたたまに口づけられ、恥はずず

かしい声を上げてしまう。

だ、だめえ……………!

「んんっ!」

さらに、ちゅううつと頂いただきに吸いつかれて、びくびくつと体を震わせる。

あっ、ああっ……………。す、吸わないでっ……………

胸むねの頂いただきはすっかり勃たち上がっている。はず、恥はにかずかしい……………

攻められているのは胸むねだけなのに、秘所ひしょがじんわりと濡れ始めているのがわかった。

「千鶴さん……………」

はあ……………という吐息と共に、耳元で名前を囁ささかれる。その低く、甘い声に酔よいそうになった。

ぼうつと身をゆだねていると、正宗さんの手はやがて胸元を離れて下腹をなぞり、ソコに触れた。

「ふあ……………ん」

くちゅ……………つと、水音が響く。その音がやけに大きく聞こえて、私は恥はにかずかしさにかつと熱が上

がったような気がした。

くちゅ……………ぐちゅり……………

指で弄いじられるたびに、その水音はどんどんいやらしさを増していく。

「ああああ……………っ」

「気持ちいい、ですか?」

そっ、そんなこと、素敵なお声で言わないでえええええ!

ますます、感じてしまう……………

正宗さんの指は徐々に激しく秘所を攻め立ててきた。

「……………ね、千鶴さん……………」

ぎゅつと目を瞑むる私のまぶたに、ちゅつと温かな口づけが落とされる。

「気持ちいいって、言っ……………?」

はうううつ! そ、そんな切ないお声でお願ねがいされたら……………わ、私は……………っ。

「……………っ、き……………もちいいです……………っ。いい……………っ……………ん……………」

涙を浮かべながら、喘あえいだ。気持ちいいのは本当だけど、「言いわされている」っていう状況が、

より快感を煽あおってくるといいますか……………

(……………頭あたま、しびれる……………)

正宗さんの指にソコを暴あかれて、ぞくぞくつと震えが体を襲やう。

絶頂てっぺんが近づいているのがわかった。そして、私は……………

「……………やっ……………い……………いっちゃ……………っ」

指だけで、達たしてしまいました。

「はあ……………はあ……………」

汗ばんだ体で荒い息を吐く。

体力の無い私は、すぐにゼーハーしてしまうのだ。

そして、そんな私を気遣うように正宗さんは優しく頬を撫でたあと、すっかり準備の整った自身に手を添えて、ゆっくりと私のナカに挿入る。

「んん……っ」

硬く熱い正宗さんが挿入ってくる時の圧迫感にはまだ慣れない。

けして嫌なわけじゃないんだ。恥ずかしいけれど、ようやく繋がれたって嬉しく思う自分もいる。

「……千鶴さん……っ」

正宗さんもはあっと息を吐きながら、切なげに眉根を寄せている。

気持ちよくなってくれてる、かな……

経験の浅い私は少しだけ不安に思った。正宗さんにもいっばい、気持ちよくなってほしい。

「んっ。んん……」

正宗さんに揺さぶられる。

思わず手を伸ばすと、正宗さんがしつかりと掴んでくれた。嬉しい……

「はあっ……っ、は……っ」

「ああっ……あっ……やあ……っ」

薄暗い室内に響くのは、互いの肌が激しくぶつかる音。二人の吐息と喘ぎ声。そして淫らな水音。

そして……

「あっ！ ああっ……まさむねさ……っ、正宗さあ……ん……」

私は大好きな旦那様の名前を呼びながら絶頂を迎えた。

その時、きゅううっつと正宗さんを締めつけてしまう。すると、正宗さんがゆっくりと抽送し、ナカに熱い白濁を注ぎこんだ。

「はあっ、はあっ……」

ずりゅ……っつと、私のナカから正宗さんが抜けていく。

……ちよっつとだけ寂しい。

「千鶴さん……」

労わるような、優しいキスが頬に落ちてくる。

正宗さんのそんなささやかな仕草の一つ一つが、たまらなく愛おしく感じられた。

自分はこの人に大切にされているって思えて、胸がときめく。

「んっ……」

正宗さんが、甘えるみたいに頬をすり寄せてきた。

か、可愛い……！ キュン死にしそう……！

(……あっ)

偶然触れた正宗さんのソレは、すでに元気を取り戻していた。

はう……。私は二回イッたけど、正宗さんはまだ一回……だもんね。

ええっつと、つまり……

「もう一回、いいですか？」

「ひゃうっ！」

正宗さんの上目遣いとか！
破壊力ありすぎるよおおおおおおお！！

正宗さんのお願いを断れるはずもなく、私はその後も限界まで正宗さんと仲良くいたしましたしな、何回目かはもう覚えていないけど、頭の中が真っ白になって、気を失うように寝入ってしまった。

ええ、それはもうグースカと。

翌日、私は朝靄の漂う早朝に、ベッドの中で目を覚ました。

二人とも裸のまま、抱き合って眠ってしまったらしい。

う、嬉しいような、恥ずかしいような……！

私は複雑な心境で、正宗さんの腕の中からそっと這い出た。

「あれ……？」

ふと違和感を覚えた。私の首に、何かがある……

私は床に落ちていたバスローブを羽織って、浴室に向かった。

灯りをつけて鏡を見ると、私の首にはネックレスが着けられている。

「これ……」

ピンクゴールドのチェーンに、ペンダントヘッドには、同じくピンクゴールドのハート型のリングが揺れていた。しかもリングの中央には、小さなダイヤが輝いている。

（かつ、可愛い……っ！ でもこれ、どうして……）

もちろん、ネックレスが勝手に私の首に巻きつくなんてホラーな現象があるはずもなく……

私はばつと寝室に戻ると、ベッドで眠っている正宗さんに視線をやった。

「ま、正宗さん……」

これって、やっぱり……！

シャンパンの載ったテーブルの上には、昨夜は無かったジュエリーショップの箱が置かれている。さらにその箱の傍には、『メリークリスマス』のメッセージカードが添えられていた。

「うううう……」

クリスマスの朝、目が覚めたら首にプレゼントのネックレスが、なんて。

こんなロマンチックなクリスマスをすごせようとは、この千鶴……

思いもなかったですよおおおおお！！

はっ！ 早くマグロを冷蔵庫に入れないと！ 感慨にふけりすぎた！

私は我に返って、食材をしまう作業に戻った。

ちなみに、この時頂いたネックレスは、今も大事に使っている。

正宗さんとデートする時とか、ね。

身につけるたび、あの朝の嬉しさが甦ってきて、とっても幸せな気分になれるんだ。

そして正宗さんも、私がクリスマスプレゼントに選んだ腕時計を今も使ってくれている。

「ただ、正宗さんは、腕時計一つじゃ返しきれないくらい素敵なクリスマスプレゼントしてくれた。」

「だから今年は、私が素敵なクリスマスを正宗さんにプレゼントするのだ！ と、張り切っているわけでありませう!!」

二人で迎える二度目のクリスマス・イブの夜。

私は半日かけて作り上げたごちそうの数々を前に、達成感でいっぱいだった。

「で、できた……!!」

マグロとアボカドのサラダに、クリームチーズとサーモンのカナッペ。ニンジンのポタージュスープに、ローストビーフ。そしてクリスマスといったらやっぱりチキン！ ということで、骨付きのローストチキンもこんがり焼きましたよ〜！

それから、ミートソースとホワイトソース、そしてチーズを幾重にも重ねたラザニア。こつてりしたモノばかりじゃ……と思って、ラディッシュとキュウリのピクルスも作った。

料理本とか、ネットで見つけたレシピを片手にね、頑張ったよ！

いやー……

「ははー」

「つ、作りすぎた……かな。二人分にしては多いけど、まあ少ないよりはいいよね！ ごちそうはたくさんあった方が嬉しいし!!」

それにケーキ作りにも挑戦してみました……!! チョコレート味のスポンジを焼いて、半分に切る。間に挟むのは生クリームとカットした苺。挟んだあと、生クリームを全体に塗る。

これがまた難しくって！ それでもなんとか塗り終わりました。

最後にクリームでデコレーションして、その上に苺を飾っていく。うん！ 完成く!!

お店のケーキに比べるとちょっと不恰好だけど、こういうのは気持ちが一番大事！（あと味も悪くない……はず！）

正宗さんが帰ってくるまでにテーブルセッティングを終わらせよう！

冬はお茶の間の炬燵で晩ご飯を食べることが多いけど、今日は洋風ディナーだし、と思い、私は台所の食卓の上を綺麗に片づけて、この日のために買ったテーブルクロスを掛けた。

そして、とっておきのお皿やグラスを並べていく。

「あ、そうだ！」

忘れるところだった。

同じく、今日のために買っておいたミニツリーを、食卓の上へ。

そうなのです。この家にはツリーがなかったのです……

ウチの実家もなあ、昔は飾ってたんだけど、私や弟が大きくなってからは飾らなくなっちゃって。今はどこにあるのやら……（たぶん物置の奥深く、だな）

正宗さんに聞いてみると、お祖父さんとお祖母さんは、特にクリスマスに何かすることはなかったから、この家にはツリーは無いと思うって。正宗さんがこの家で暮らすようになった時には、正

宗さんはもう大きかったし、クリスマスを祝うってことも、この家ではあまりやったことがなかったらしい。

『ああ……でも幸村がよく家に押し掛けては、「クリスマスだ！」って騒いでいきましたね』

幸村——幸村真さんは、中学時代からの正宗さんのご友人で、今も同じ職場に勤めていらつしやいます。ちなみに、幸村先生は養護教諭です。

これまでにも、よく家にご飯を食べに来たり飲みに来たり、一緒に旅行に行ったりして、仲良くさせてもらっている。

なのに、そんな迷惑そうに言わなくても……。でもちょっとだけ懐かしそうに語る正宗さんに、ついついニヨツとしてしまいました。

まあそれはともかく、今はまだ二人だけだから、小さいもので十分かな？　って、思つてこのミニツリーを買つたけど……

もし私達の間の子供ができたら……。おつきなツリーを買つて、毎年家族で飾りつけをして、さ。誰がてっぺんの星をつけるか、で争つたりして。

で、飾りつけが終わったら、ツリーを見ながら一緒にごちそう食べたりしたい……。な、なんて。

「きゃー！　幸せ家族計画!!」

思い描いた未来に、なんだかちよつと照れ臭くなって、私はバンバンと、セッティングしたばかりの食卓を叩きながら（危ない危ない）、正宗さんのお帰りを待ちました。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさい！」

おや？　ご帰宅された正宗さんの腕の中に、ラッピングされた箱が二つある。

「ワインとシャンパン、買ってきましたよ」

「きゃー！　嬉しいです!!」

今日はクリスマス・イブだからって、酒屋さんがラッピングしてくれたんだって。ワインとシャンパンを、それぞれグラスに注いだら準備はオツケー！

二人っきりのクリスマスパーティーの始まりです。

「メリークリスマス！」

「はい。メリークリスマス」

私達は食卓につき、乾杯しました。

「すごいごちそう……。ですね。全部、千鶴さんが？」

「はいっ！　張り切っちゃいました。はは、で、作りすぎちゃいました……」

苦笑しながら、ワインを一口こくりと飲む。

んんー！　このワイン美味しい!!　それにシャンパンも。

……でもふいに、去年の甘くエロいクリスマス・イブを思い出して、顔が火照つちゃう……。ね。たはは……

あ、そうだ料理！　料理食べてください、正宗さん！

「いっぱい食べてくださいね！」

「はい」

正宗さんは、どの料理も「美味しいです」と言って、本当に美味しくそうに、いっぱい食べてくれた。それを見ると、私もつい箸が進んでしまう。

ここにはBGMなんてないし、家の台所だし、一流のシェフ達が作る料理には遠く及ばないけれど……

「美味しい〜！」

私はすっごく、すっごく楽しくて。嬉しくて。

幸せすぎて、なんか涙が出そうになるな、なんて思いながら、ぱくり！と骨付きローストチキンにかぶりついた。

食後、私はいそいそと、冷蔵庫から少し不恰好なクリスマスケーキを取り出す。

「あの、実はケーキも焼いてみました」

「えっ。それは……すごいですね」

いえいえいえいえいえ!! と、私は高速で手を横に振った。

あの、ケーキっていつも、そんな本格的なものじゃないんで！

そんな風に驚いてもらえるのが申し訳ないくらい、あの、初心者向けのレシピで作ったやつなんだ！

恐縮しつつ、私は手作りケーキにナイフを入れる。

ああああ……、断面はやっぱり売り物のケーキと違って不恰好だなあ。綺麗な層になってない……

やっぱりお店で買った方がよかったかな……なんて、ちよつぱり後悔しながらお皿に取り分けて、正宗さんに黙って差し出す。

「……………」

ぱくり、と正宗さんがケーキを頬張るのを、ついガン見してしまう。

ま、不味くないですか……？ スポンジはホールのもを作ったから、味見できなかったんだよね。(クリームはちよつと舐めたけど……いや、舐めすぎた気がするけど。だってつい、ね)

い、一応正宗さんの好みに合わせて、生地はビターチョコレート味にして、クリームも甘さを控えめにしたんだけど……

「……………」

「美味しいです……！ 千鶴さんは、すごいですね……」

「ひゃっ……………」

ほ、褒められたあああああ！

う、嬉しいよおおおおお!!

「……………」

やばい！ 顔がやけてしまう。

私にはやけ顔のまま、ぱくつとケーキを口に入れた。
苺の甘酸っぱさと、生クリームの甘さが口の中で溶け合う。

初めて自分で作ったクリスマスケーキ。……うん！ 美味しい……です！（よかったあ！）

「……あ、千鶴さん」
「ふえ？」

ケーキは別腹だよねえ、なんて自分に言い訳しながら、ぱくぱくとケーキを食べていたら、正宗さんに呼ばれた。

「なんだろう？」 と思ったら、正宗さんはご自分のお鼻をちょん、と指差す。

「クリーム、ついてますよ」

「え？」

それはつまり、私の鼻にクリームがついてるってこと？

「ええっ!？」

なんと間抜けなっ……！ 私だけ食べるの下手なの!? 恥ずかしいー!

慌てて鼻を擦る。……でも、あれ？ あれれ？

クリーム、ついてない……？

「……ははっ」

きよとんと首を傾げる私を見てふつと噴き出した正宗さんが、笑い声を上げた。

あつ！ ああああああ！

「まっ、正宗さん！」

嘘をついたんですね!! ひどい！ 本気で焦ったのに！

「すみません。つい……」

「もおおおお！」

まだ笑ってるし！ からかわれたー!

……っていうか、気づけ私！ さすがに鼻にクリームをつけるほどがついていないし、ついていたら感触でわかるだろー!

ケーキを食べたあとは、残ったピクルスや料理をおつまみにお酒を楽しんだ。

（うー、このワイン本当に美味しい！ ワインにハマりそうだよ……）

そんな幸せな気分になりながら、いつもより遅い時間にお風呂に入る。そして、先に入浴を済ませて寝室で寛いでいる正宗さんのもとへいそいそと向かう。

——そんな私は今、パジャマではなく、ある衣装を着ております。

そして手には、クリスマスプレゼント……を持ってあります。

ちなみに今年のプレゼントはね、手袋とストールにしてみた。手袋は黒の革のヤツで、ストールは綺麗なライトブルー。正宗さんのコートにすっごく似合うと思って、買ったんだ。

だけどこれだけじゃまだ、去年の素敵すぎるクリスマス・イブのお返しにはならないんじゃないか、って不安に思った私は、一週間ほど前に幸村先生に相談したのです。

『正宗さんに素敵なクリスマスプレゼントしたい』と相談した私に、幸村先生はにやあつと笑ってから（いや、ホントに「にやあ」って笑ったんだって！）、『俺に任せて！』と胸を叩いた。

そして一昨日の夜、正宗さんが帰宅する前にこっそり我が家を訪ねて来た幸村先生に、『ちよつと早いけど、これ、俺からちーちゃんにクリスマスプレゼントね！』
と、今私が着ている物を渡されたのだ。

幸村先生いわく、『これを着て「私がプレゼントです」って言えばオッケーだよ』と……
（ふぐぐ……。着てみたものの……。や、やつは寒い。いろんな意味で……）

めっちゃいい笑顔で、親指をぐっ！ と立てた幸村先生に乘せられて着てみたけれど……。この期に及んで、「やつぱりまずいんじゃないや……」とためらってしまう。

私が今着ているのは、胸元とスカートの裾に白いもこもこがついている赤いベアトップのワンピース。

そして頭には、赤いサンタ帽。

いわゆる、『サンタガール』のコスプレをしているのですよ！

最近のサンタ衣裳って、いろんなデザインがあるんだね。これも可愛い……。とは思うんだ。けど、だげどね。あの、幸村先生……

これ！ スカートの丈、めっちゃ短いんですけど！

それにこの季節にベアトップって！ 肩も背中も丸出し！ 露出過多！！

こんな衣装じゃ、いくらサンタさんでも寒空の中、プレゼント配れないよ！ と、つついツイッ

コミを入れてしまう。

「ううう……」

でも、もう着ちゃったし……

他に妙案も思いつかばなかったし……

私は意を決し、寝室に足を踏み入れました。（ちなみに室内でブーツを履くわけにはいかないの
で、白のニーハイを履いております……）

* * *

千鶴さんと一緒に迎える二回目のクリスマス・イブ。

今年もどこかへ食事に行けたらよかったのだが、俺の仕事が忙しくて、家でクリスマスパーティーをすることになった。

申し訳ないと謝る俺に、千鶴さんは『いえいえそんな！』と首を振って、『今年は、家でクリスマス
マスを祝いましょー！』と言ってくれた。

家に帰ると、綺麗にセッティングされた食卓に、美味しそうな料理がずらりと並んでいる。

……すごいな。俺は素直に感心した。

こんなに料理を作るのは、大変だったろうに。

千鶴さんが作ってくれた料理はどれも美味しかった。

何より、美味しそうに食べ、美味しそうに飲む千鶴さんとの食事が、楽しくてしょうがなかった。去年のクリスマス・イブもよかったけれど、こんな風に家で迎えるクリスマスも悪くない。

たぶん俺はこの時、柄にもなく舞い上がっていたのだと思う。

だから、だろうか。千鶴さんの手作りケーキを食べている時、ふいに悪戯心が湧いて、「鼻にクリームがついている」なんて言ってからかかってしまった。

千鶴さんは真に受けて、慌てて鼻を擦る。そんな仕草がまた、可愛らしかった。

しかしすぐにクリームがついていないことに気づいて、「あれ？」と考えこみ、「はっ！」とようやく嘘に気づいた表情が、面白いやら可愛らしいやら。

「……ははっ」

俺はついつい、笑ってしまった。

「まっ、正宗さん！」

「すみません。つい……」

「もおおお！」

ああ、千鶴さんが顔を真っ赤にして怒っている。

でも、「そんな顔も可愛い」と言ったら、また怒られてしまうだろうか？

そんな楽しい夕食のあと、先に風呂に入った俺は、寝室で悩んでいた。

「……ふむ」

クリスマスプレゼントをいつ渡そうかと、ラッピングされた小さな箱を手に考える。

去年は眠っている彼女の首に、プレゼントのネックレスを着けた。我ながらキザなことをしてしまったと思う。もしかしたら引かれるかもしれないと思ったが、あの朝、目覚めた俺の前で、千鶴さんは泣きそうな顔で、『嬉しいです！』と喋ってくれた。

そして今も、あのネックレスを大事に使ってくれている。

それが嬉しくて、今年も「何がいいだろうか」と、俺なりに頭を悩ませてプレゼントを選んだ。そんな時間も、楽しかった。

「今年は、ストリートに手渡ししようか……」

小細工をせずに直接渡そうと、枕の下にプレゼントを隠していると……

「……し、失礼しまーす」

なぜかそんな言葉と共に千鶴さんが寝室へ入ってきた。

「ち、千鶴さん……!？」

ドアの方を見やると、なんと彼女は寝巻ではなく、サンタ服を身に纏っていた。

頭にはサンタ帽がのっている。しかし……そのスカート、丈が短いですね……

自然と、彼女の太股に目がいつてしまう。

「あ、あのう……。正宗さんに、プレゼントがありました……」

千鶴さんはおずおずと俺に近寄ると、プレゼントを差し出した。

「こ、これ！ 受け取ってください！」

「ありがとうございます……。開けてもいいですか？」

正直、なぜ千鶴さんがそんな恰好かっこうをしているかの方が気になるのだが……。俺は平静を装い、プレゼントを受け取った。

リボンを解ほどき、袋から中身を取り出ししてみると……

「手袋と、ストール……？」

シンプルだが趣味のいい、手袋とストールが入っていた。

「はい。あの、通勤の時に着けてもらえたら、と思って……」

「すごく嬉しいです」

ストールをふわっと首に巻いてみると、肌触りがよくて温かい。手袋も俺の手の大きさにぴったりだった。

「……ところで、千鶴さん。その恰好かっこうは一体……」

そう問うと、千鶴さんは「うっ」と言葉が詰まらせる。

そして、ぼつりと言った。

「……正宗さん、喜んでくれるかな……っ？ と、おも、思いました……」

さらに千鶴さんは上目遣いで「だめ、ですか？」「似合いませんか？」と続ける。

そんな可愛い恰好かっこうで、そんな可愛いことを言わないでください……。っ。

「いえ、とても……嬉しいです」

短いスカートから覗く太股ふとももが、なんとも色っぽい。正直、その……とても喜んでいきます。

俺はおいで、と手を広げて、恐る恐る近寄ってきた千鶴さんを膝ひざの上に抱きかかえた。

「プレゼント、ありがとうございます。でも、もう一つほしいものがあるんです」

「え……？」

「千鶴さんを、俺にくれませんか？」

こんな可愛いサンタさん、放っておけません。

「っ……！ あ、あの……」

ああ、そんなに顔を真っ赤にして。時々こんな大胆だたんなことをするくせに、本当に可愛い人ですね。

「わ、私はもう、とつくに……」

「……………」

「正宗さんの、ものです」

「っー！」

俺は思わず、彼女を抱きしめて肩口に顔を埋うずめた。

千鶴さん……。それは……

最高の、殺し文句ですよ。

* * *

「ふ……んっ……ふあ……っ……」

私はサンタガールの衣装を着たまま、ベッドの端に腰掛ける正宗さんの膝の上に乗っていた。しかも足を大きく開かされ、正宗さんと向かい合う形で座らされている。(ちなみにサンタ帽はあさり床に落ちました……)

「や……くすぐった……い」

そして今、正宗さんの舌がびちゅびちゅと、私の耳をなぶっている。

「はう……」

うう……。み、耳つてこんな……気持ちいいの……？ くすぐりたいけど、ぞくぞく……する。熱い吐息が耳にかかり、私まで体が熱くなる……ううつ……

「……………ふあ……………」

そして腰に回っていた正宗さんの手が、すすすつと、短いスカートの裾をたくし上げる。

「つ……………」

ひゃあああああ！ お、お尻が！ ぺろんと丸出し状態です！

あわわわ……

腰を浮かせて逃げようとするけれど、正宗さんはお尻を両手でしっかりと支えて、逃がすまいとする。

「んっ」

そんなに揉まないでー！ お尻、揉まないでー！！

「やっ……………」

そして正宗さんはぼすんと、私の胸に顔を埋めた。

「んっ」

彼はワンピースの胸元を啜えて、ぐつと下にずり下げる。

入浴後はブラを着けないから、あっけなく胸が露わになった。

「……………んんっ！」

胸の頂に、正宗さんが吸いついてくる。

「くああっ……………ん」

びちゃ、と音を立てて、舐められ、私はただ、喘ぐことしかできない。

さらに、舌先でころころと転がすみたいに頂を廻られる。唇で軽く引つ張っては、ちゅうつと吸いついてくる。腫れて赤くなるんじゃないかってくらい、その愛撫は執拗に施された。

正宗さんは口で胸を攻める一方で、大きな両の手でやわやわとお尻を揉み続けている。

時にはすつと肌の上を滑るように、そして時には揉みしだくように緩急をつけて攻められ、くすぐったさとはまた違う感覚が——快感が、湧き起こってくる。

すると正宗さんはそんな私の変化を悟ったのか、敏感な場所に指で触れてきた。

「あうっ……………」

下着越しに割れ目をなぞられる。溢れた滴がクロッチから浸み出して、そこはもう、しつとりと濡れそぼっていた。張りついた布の上からくにくくにゆと捏ねられて、体がびくびくつと震えてしまう。

「……あつ……！ あつ、あつ、ああつ……っ。ふ、ふあ……っ。もう……」
目尻に涙が浮かんできた。そして私の秘所からも、ますます滴が溢れる。

「んんっ」

擦るように動く正宗さんの指を、いやらしい滴が濡らしていく。

まるで私が正宗さんを汚してしまっているような気がして、その妙な背徳感に腰が動いてしまう。
「すぐ濡れてますね」

「ひっっ」

い、言わないで……

くすくすと笑いながら、正宗さんは楽しそうに私の耳元で囁いた。

「下着、すごいことになってますよ？」

「っー」

かあつと頬が熱くなった。ま、正宗さん意地悪だ！ わざと、そんなことを言って！

でも正宗さんの言う通り、パンツはぐしよぐしよに濡れていて、私は今すぐ脱いでしまいたくなかった。

「や……やだ……」

「どうしてほしいですか？」

ほら、言ってる？ と言わんばかりに、正宗さんがこちらを見つめながら胸の頂を甘噛みする。

びくっ！ と体が震えた。言わなきゃずっとうして苛め続けるって、正宗さんの視線が告げて

いるような気がして、私は羞恥心を捨て去り、おねだりする。

「ぬ、脱がして……」

「はっ」

正宗さんは満足気に微笑むと、お尻を揉んでいた手でパンツの端を掴んで、ぐいっと下げる。

腰を浮かして下着を脱がせてもらおうとしたけれど、正宗さんのお膝の上に座っているせいで、

下着は中途半端に太股の位置で止まってしまった。

秘所に張りついていた布の感触からは解き放たれたけれど、この恰好がすごくいやらしく思えて、
落ち着かない。

「んっっ！」

そわそわしていると、正宗さんはくちゅつと音を立てて、指を秘所を攻め始めた。

「温かくて、とろとろですね」

「っっ」

今日はいっぱい言葉攻め、してくる……っ。

そんな風に言葉でも私を犯しながら、正宗さんの指はくふっ、くふつと徐々に激しく抽送を繰り返した。

「あつ……ああつ……」

かくかくと腰が揺れてしまう。疼いてしまう。

だって、き、気持ちよくなって……。頭、真っ白になっちゃ……

「や……やだ……イッちゃう……」

何度体を重ねても、この瞬間は快感と同時に怖さも湧き起こってくる。理性は失われ、私はこの二つの感情に突き動かされて、正宗さんの体にぎゅうつとしがみついた。気持ちいい、もつとしてほしい。でも、意識が飛んでしまいそうな気がして怖いから、しっかりと抱きしめていてほしい。

「まさむねさ……っ、あぁっ！」

背中を反らし、私は旦那様のお膝の上で果ててしまった。

必死で正宗さんにしがみつきの、ぜえはあと荒い息を吐く。

さっきまでは腰を浮かしていたけれど、今はぴったりと密着している状態だからわかってしまった。正宗さんのモノが、すっかり硬くなっていることが。

これからこの大きなモノが挿入ってくるんだと思うと、無性にドキドキした。絶頂を迎えたばかりなのに、私ははしたなくも自分からおねだりするみたいに、正宗さんの唇に口づける。

「ん……っ」

下唇をちゅうつと吸い上げるような、そんないやらしいキス。

それを合図に、正宗さんはすつと私の体を抱き上げ、ベッドに仰向けに押し倒した。

パンツを取り払われ、足を開かされる。

ひあああああああっ！

「……いい眺め、ですね……」

こうなると、元から短いスカートはもう何も隠してくれない。

何この羞恥プレイ！

「や、やだぁ……」

み、見ないでえっ！

こ、こんな蛙の解剖図みたいに足を開かされた姿っ！ まじまじと見ないでえ……！

正宗さんの目を覆おうと両手を正宗さんに伸ばしたけれど、彼はそんな私にお構いなしに、両足をひとまとめに掴んで高く掲げると、私の股間に端整なお顔を近づけて舌で触れてきた。

(もうやだ恥ずかしくて死ぬ！)

「あっ……！」

ぴちやりと音を立てて、ソコを舐める。

正宗さんは花びらを丁寧になぞって、時折ちゅ……と、吸うのだ。

「っっ！ つは……っあ……っ」

そのたびにキュンキュンと、お腹の奥が疼く。

どうしよう。気持ちよくなって、頭がおかしくなりそう……

けれど正宗さんは「もつとほしいですか？」と問うように、上目遣いで私を見つめて焦らしてくる。

もお……やだぁ……っ！

そんな……意地悪な……こと……っ、しないでえ……

「まさ……っ。正宗さあ……ん」

理性も羞恥心も吹っ飛んだ気がした。

頭にあるのは、もっと気持ちよくしてほしい、もっと、ちゃんと触ってほしい……という淫らな欲求ばかり。

「……どうしてほしいですか？ 千鶴さん」

秘所から顔を離し、身を起こした正宗さんが、少しだけ意地悪な笑みを浮かべる。

そして指先でつつ……と、ニーハイを履いたままの私の足をなぞった。

「言って？」

「……っ、く。あ、あ……の……正宗さんの……」

ひっ、ひええええええええっ！ またっ、言葉攻め！

頑張れ！ 最後まで言うんだ、千鶴！！

「……い、……挿れて……くださ……っ」

で、でも……。こんな風にいやらしいこと言っちゃうシチュエーションに、ますますキュンキュンしちゃって、濡れちゃう私はもう駄目ですね、すみませええええええん！！

去年のクリスマスの初々しさはどこへ行った！！

この一年で、私はすっかり……エ、エロい女になってしまったようです。

* * *

「……い、……挿れて……くださ……っ」

目に涙を浮かべながら、いやらしい恰好で（そうさせているのは俺なのだが……）懇願する千鶴さんに、劣情を煽られる。

「……っ」

……その顔は、やばいです。千鶴さん……

たまらず、俺は足に引っ掛かっていた彼女の下着を脱がせると、性急に千鶴さんのナカに押し入った。

「んんっ！」

一度絶頂を迎え、すでにしどどに濡れていた彼女の蜜垂は、すんなりと俺を受け入れてくれる。しかも、ソコはきゆうきゆうと俺を締めつけてきた。

「……くっ」

息を呑み、彼女の両太股を掴んで、ぐっと自分の方に引き寄せる。

「……動きますよ？」

一言告げてから腰を振った。

「あ……っ。ああんっ……！！」

動くたびに彼女の胸がたゆんと淫らに揺られて、肌と肌が合わたる音と、いやらしい水音が室内に